

02-SI

海老澤文庫

新約
聖書

馬可傳

全

02-SI 23-1 2-3 1977

耶穌降生二千八百八十年 米國聖書會社

新約聖書馬可傳

明治十四年 日本橫濱印行

橫濱製紙分社新鑄鉛版

海老澤有道文庫

新約全書馬可傳福音書

第一章 此れ神の子イエスキリストの福音の始あり 二 預言

者の録して視よ我あんぢに面前よ我使を遣さん彼あんぢ

の前よ其道を設くべし 三 野よ呼る人の聲あり云く主の道

を備へ其徑を直せよと有が如く 四 ヨハ子野よ於てバ

プテスマを施し罪の赦を得させんが爲よ悔改のバプテス

マを宣傳たり 五 ユダヤの全國およびエルサレムの人々か

れよ來りて各々その罪を認むじヨルダンといふ河よてバ

プテスマを受 六 ヨハ子ハ駱駝の毛衣を着腰よ皮帶をつ

ね蝗蟲と野蜜を食へり 七 かれ宣傳けるハ我より勝れる者

わが後よ來らん我ハ屈て其履の紐を解にも足ぎ 八 我ハ水

新約全書 まこでん第一章 自一至八節

をもて爾等なんぢらもバプテスマを施ほどこじくが彼かれハ聖靈せいれいをもて爾曹なんぢらにバプテスマを施ほどこせべし九 當時とうじイエスガリラヤのナザレより來きこりヨルダンにてヨハ子よはこよりバプテスマを受うけ 頓とんて水みづより上あがれるとき天てん開わかれ靈みやま鳩はとの如ごとく其上うへに降くだるを見たり十一 又また天てんより聲こゑありて云いふふんぢハ我が愛あい子こわが悦よろこぶ所ところの者ものありと十二 ○ 斯かくて靈みやまたぢちよイエスを野のに往ゆじむ十三 され四十よそ日にち野のに在まりてサタンさたんに試まされ獸けものと共ともにをれり天てんの使つかひ等たちこれよ事つかへぬ十四 ○ ヨハ子の囚とられじ後のちイエスガリラヤガリラヤに至いたり神かみは國くにの福音くふいんを傳つたいひけるハ十五 期まハ滿みり神かみの國くにハ近ちかけり爾曹なんぢら悔く改あらめて福音くふいんを信あん十六 ○ イエスガリラヤの湖みづうみの邊ほとりを歩あゆむ時ときシモンしもんと其兄弟そのきやうだいアンデレあんでれの湖うみに網あみうてるを見みる彼等かれら

ハ漁者つなごりびとあり十七 イエス彼等かれらに曰いひけるハ我われも從まへ我爾曹なんぢらを人ひとを漁つなごる者ものとせん十八 彼等かれらたぢちよ其網そのあみを棄すてて之これに從まへり十九 此こゝより少すこし進すす行ゆぜベダイべだいの子こヤコブやこぶとその兄弟きやうだいヨハ子の舟ふねに在ありて網あみつくるふを見みて二十 直ただに彼等かれらを召よ給たまひじらば其父ちちゼベダイぜべだいを備やとひ人ひとと共ともに舟ふねに遺のこして彼かれに從まへり二一 ○ 彼等かれらカベナウムべなうむに至いたるイエスイエス即すなはち安息日あんじくにちに會堂くわいだうに入いりて教かへを爲なし二三 人々ひとびとその教かへを駭おどき合あひ蓋學うばがく者ものの如ごとく二四 其會堂そのくわいだうに汚けたる鬼おにに憑つかれたる人ひとありて二五 喊さけびひけるハ二六 唉あゐナザレなざレのイエスイエスよ我われ儕らハ爾なんぢと何なんの與かり有あらんや爾なんぢきたりて我われを滅ほろす二七 我われふんぢハ誰たれなる乎かを二八 知しる二九 神かみの聖せいなる者ものあり三〇 イエスイエス之これを責せめて曰いひける三一

ハ聲を發すこと勿き其處を出よ 汚たる鬼の人を拘擥
 させ大聲よ叫びて彼を出たり 衆人モ驚き相問て曰け
 るハは何事ぞや是いかなる新しき教ぞや汚たる鬼さへ權
 威をもて命じければ從へり 是は於てイエスの聲名徧く
 ガリラヤの四方よ播りぬ ○ 彼等やがて會堂を出ヤコブ
 及ヨハ子と共にシモンアンデレの家よ至しよ シモン
 岳母熱を病て臥おければ或人たごちよ之をイエスよ告
 イエス往て其手をとり彼を起しければ熱たちまち去ぬ斯
 て其婦かれらよ供事たり 夕かた日の落とき人々をばて
 の病を患へるもの鬼よ憑たる者をイエスよ携へ來る
 の邑こぞりて門よ集れり イエス各様の病を患へる多の

人々を醫し又多の鬼を逐出し鬼の言ふ事を許さざりき蓋
 鬼かれを識たるよ因てあり ○ 味爽よイエス早く起人な
 き所にゆき其處にて祈禱せり シモンおよび彼と共に在
 し者等ろの跡を慕ゆき 彼よ遇て曰けるハ衆人モ爾を
 尋ぬ イエス彼等よ曰けるハ我ハ教を宣傳る爲よ爾曹と
 借よ附近の鄉村へ往ん我これが爲に來れば也 イエス遍
 くガリラヤの國を経めぐり其會堂にて教を宣且鬼を逐出
 せり ○ 癩病のもの一人かきよ來りて跪き求ひ曰けるハ
 爾もじ聖意よ適ときハ我を潔く爲得べし イエス憫もて
 手をのべ彼よ按て我意よ適へり潔かれと 言やいさ直よ
 癩病もかれ其人きよまれり イエス嚴く之を戒め慎みて

何をも人よ告る勿れ但ゆきて已が身を祭司よ見せ其潔ら
 れじ爲よモーセが命せし所の物を獻て彼等よ證據をみせ
 と言て去しめたり 然ども彼いで先この事を大よ言り
 た一語り廣めければイエス此後あらをよ城よ入がたく獨
 人なき所よ居給ひしが人々四方より彼よ來れり
 數日の後イエス復カペナウムよ來しよ 彼の室よ
 居こと聞えければ直よ多の人々集きたり門よ立べき場處
 さへをあき程ありきイエス彼等よ教を宜 此よ癡癡を病
 たる者を四人よ昇せイエスよ來れる者ありしが 群集よ
 よりて近づき難うりければ彼の居どころの屋蓋を取除き
 癡癡の人を床のまゝ縋下せり 五 イエス其信仰を見て癡癡

の人よ曰けるハ子よ爾の罪赦さきたり 數人の學者こゝ
 よ坐し居じが心中よ謂けるハ 斯人ハ何故かく惡口を言
 か神よあらきて誰か罪を赦すことを得ん 八 イエス直よ
 彼等が心中よ斯の如き事を論ざるを自ら其心よ知て彼等
 よ曰けるハ爾曹あんぞ心中よ斯る事を論ざる乎 癡癡の
 人よ爾の罪ハ赦されたりと言て起て爾の床を取て行と言
 と孰れ易や 十 うれ人の子地にて罪を赦すの權威あること
 を爾曹よ知せんとて遂よ癡癡の人よ 我なんぢよ告おき
 て床を取あんぢの家よ歸きと曰ければ 十二 うの人たぢに
 起て床をどり衆人の前よいづ衆人みあ駭き神を崇めて曰
 けるハ我儕いまだ斯の如ことを見むことあし 十三 イエスマ

た海邊うみべに往ゆし人々ひとびとみあ彼かれに來きければ是等これらを教しふ十四此こよ
 り進すすてアルバヨの子こレビといふ者ものの税吏かつかせりの役所やくしょに坐まじ居ゐ
 けるを見みて我われに從したがへといひければ彼等かれらは從したがへり○十五斯かくて
 イエスイエスの家いへにて食たぶくする時ときおろくの税吏かつかせり罪つみある人々ひとびとイエ
 ス及び弟子でしと共ともに坐ませり是等これらの者もの許多おほくありてイエスイエスに從したが
 ひぬ十六學者がくとパリサイの人ひとかれが税吏かつかせりれよび罪つみある人ひとと
 共ともに食たぶくするを見みて其弟子そのでしに曰いひけるハ何ゆゑな税吏かつかせり罪つみある人ひと
 と共ともに食たぶくする乎か十七イエス聞きて彼等かれらに曰いひけるハ康強すこやかある
 者ものハ醫者いしやの助たすけを需もとめき唯病たひやまひある者ものこれこれを需もとめわが來きじハ義人たけなひ
 を召まねくためよ非あらき罪つみある人ひとを召まねきて悔改くいあらためさせんが爲ためあり○十八
 ヨハ子の弟子でしれよびパリサイの人ひとつねに斷食だんおきする事ことあり

ければ彼等かれらイエスイエスに來きいひけるハヨハ子の弟子でしとパリサイ
 イの弟子でしハ斷食だんおきするに兩なんぢの弟子でしハ何ゆゑな斷食だんおきせざる乎か十九
 イエス彼等かれらに曰いひけるハ新郎はなむこの朋友ともその新郎はなむこと共ともに在ある間うち
 断食だんおきすることを得うべき乎かかれら新郎はなむこと共ともに在ある間うちハ斷
 食おきすることを得うじ二十將來あしたかれら新郎はなむこをとらるる日ひきたら
 ん其日そのひにハ斷食だんおきすべき也なり新あらたしき布きれを舊衣ふるきころもに縫ぬつくる者もの
 あらじ若もし然しかせば其新そのあらたしき補おぎなへるもの舊ふるきを綻ほころはして其破やぶか
 へつて惡あるべし二二亦またあたらしき酒さけを舊ふるき革囊かはぶくろに在ある
 者ものあらじ若もし然しかせば新酒あらたハ其囊そのふくろを破裂はりさけて酒さけもれいで革囊かはぶくろ
 も亦壞またるべし新酒あらたハ新あらたしき革囊かはぶくろに盛いべきもの也なり○二三倍さかイ
 エス安息日あんそくに麥むぎの畠はたけを過まりし其弟子そのでしあゆみつゝ麥むぎの穂ほ

を摘つみえじめければ二四 パリサイの人彼かれは曰いひけるハ彼等安息あん日にちは爲なまじき事ことをするハ何故なぞ二五 イエス答こたへけるハダビデ及び従したがふ在あり者ものの乏せまくして飢うむとき行なりたる事ことを未いまだ讀よまざる乎か 二六 即すなはち祭司さいしの長まさアピアタルのとき神かみ殿のいへに入いりて唯ただ祭司さいしの外ほかハ食くらふまじき供物くわつもののパンを食くらひかつ従したがふ在あり者ものにも與あたり二七 また彼等かれらは曰いひけるハ安息日あん日にちハ人ひとの爲ために設まうけられたる者ものにして人ひとハ安息日あん日にちの爲ために設まうけらる者ものは非あらき二八 然されは人ひとの子こハ安息日あん日にちにも主またる也なり

第二三章 イエスマた會堂くわいどうに入いりて一手ひとて枯なへたる人ひとありけるが衆人ひとイエスを訟うとじて彼かれハ此人このひとを安息日あん日にちに醫いすや否いなと窺うへり三 イエス手て枯なへたる人ひとは曰いひけるハ中なかに立たてよ四 また

衆人ひとは曰いひけるハ安息日あん日にちに善よき行ないと惡あき行ないと生いけるを救たす二 殺ころすと孰いづれをなす爲なすべき彼等かれら默然もくねんたり五 イエス怒いかりふくみかけて環か視まむ彼等かれらが心こころの頑硬かたくなあるを憂うれへ手て枯なへたる人ひとは爾なんぢの手てを伸のぶ三 よと曰いひけるは彼かれその手てを伸のぶ四 即すなはち他ほかの手てのおどく愈いたり六 パリサイの人ひといで、如何いかしてうイエスを殺ころさんと直ただちへロデの黨ともは相謀あひ七 ○ イエスその弟子でしと共ともに海うみ邊へに退あり八 多おほくの人ひと々々ガリラヤより彼かれに從したがへり又またユダヤ九 エルサレムイドマヤヨルダンの外むかまたツロとシドンの邊へより多おほくの人ひと々々イエスの行ない事ことを聞きて彼かれは群むらり來きる九 イエス人々ひと々の群集ぐんじふに因よりて擁かなやまさる事ことあからん爲ために小舟こぶねを我われは備うなへ一〇 其弟子そのでしは曰いひる一〇 是これイエス數多あまくの人ひと々々を愈いや

しゝくに因て凡て疾ある人々手にて彼も捫んとて擁逼しが
 故あり 十二 また汚たる鬼かれを見て其前も俯伏さけびて爾
 ハ神の子ありと曰しを 十二 イエス彼等も我を揚すこと勿き
 と厳く戒めたり ○ 十三 イエス山に登て其意も適ふ所の者を
 召しかは來りて彼に就り 十四 是に於て十二人を立て己と借
 に置また教を宣傳る爲に遣し 十五 かつ病を醫じ鬼を逐出す
 の權威を授く 十六 乃ちシモンをベテロと名け 十七 ゼベダイの
 子ヤコブと其兄弟ヨハ子この二人をボア子ルゲと名く之
 を譯は雷の子あり 十八 又アンデレポリポバルトロマイマタ
 イトマスアルバヨの子ヤコブタツダイカナンのシモン 十九
 又イスカリオテのユダ此ハイエスを賣し者あり 二十 此等

の者家に入しに多の人々また來り集りけきは食する暇を
 かかりき 二二 その親屬きとて彼ハ狂氣せりと言て之を拏ん
 どて來る 二三 又エルサレムより下れる學者等も彼ハペルゼ
 ブルに憑れたり且鬼の王に藉て鬼を逐出すありと曰り 二三
 イエス彼等を召び譬を以て曰けるハサタンハ何でサタン
 を逐出し得んや 二四 をし國おのれに悖て分争ハ其國立べ
 うらぎ 二五 また家おのれに悖て分争ハ其家立べからぎ 二六
 若サタン己に悖り起て分争をも彼たつ可うらぎ反て終る
 かるべし 二七 誰にても勇士の家に入て其家具を奪んとせば
 先勇士を縛らざれば奪ふこと能えじ縛て後うの家を奪ふ
 べし 二八 われ誠に爾曹に告ん人の凡の罪と瀆す所の褻瀆ハ

救るべけれき 聖靈を漬す者ハ限なく救さる可からき限
 るき刑罰に干らん 斯いへるハ人々イエスを惡鬼に憑た
 りと言しが故也 ○ 子の兄弟と母と來て戶外にたち人を
 遣じてイエスを呼しむ 多の人々イエスを環て坐じたり
 しが彼に日けるハ視よ爾の母と兄弟戶外に在て爾を尋ぬ
 三三 イエス答て日けるハ我母わが兄弟ハ誰ぞや 斯て側に
 坐する人々を環視じて日けるハ我母わが兄弟を見よ 三五
 二 神の旨に従ふ者ハ是わが兄弟わが姉妹わが母あり
 集りければ彼舟に乗て坐じ凡の人々ハ海に沿て岸に立り
 二 され譬をもて多の事を彼等に教ふ教て日けるハ 三 聽よ

第四章

種播もの播んとて出 播るとき或種ハ路の傍に遺しが空
 の鳥きたりて之を食へり 或種ハ土うすき磽地に遺しが
 土深からねは直に萌出たれき 日出しかは隠き根なきが
 故に枯たり 或種ハ棘の中に遺しが棘うだちて之を蔽け
 れは實を結ほざりき 八 また或種ハ沃壤に遺じが其苗ええ
 いで々蕃り實を結ること或ハ三十倍或ハ六十倍あるひハ
 百倍せり 九 また彼等に日けるハ耳ありて聽ゆる者ハ聽べ
 し ○ 衆人の居ざりし時イエスの側に在し者と十二弟子
 十二 此譬を問しかは イエス彼等に日けるハ神の國の奧義
 十二 を爾曹にハ知ことを賜へと他の者にハ凡て譬を以てす
 十二 是かれら視るとき視ても見き聽るとき聽ても聰らき心を改め

て其罪の赦を得ざらん爲あり 十三 また彼等に曰けるハ兩曹
 この譬を知ざるう然は如何して凡の譬を識ことを得んや
 十四 うれ播者ハ教を播あり 十五 道の播れて路の傍に遺しもの
 ハ人道を聽しとき直にサタン來て其心に播れたる道を奪
 取あり 十六 また磽地に播れたるものハ人道を聽とき直に喜
 びて之を受 十七 然ども己に根あきが故たゞ暫時のそ後道の
 爲に患難あるひハ迫害に遇ときハ忽ち礙く者なり 十八 又棘
 の中に播れたるものハ人ことばを聽き 十九 此世の思慮ど
 貨財の惑また各様の情欲いり來りて道を蔽により終に買
 を結ざる者あり 二十 沃壤に播れたるものハ人道を聽て之を
 うけ或ハ三十倍あるひハ六十倍あるひハ百倍の實を結ぶ

者なり 〇 二 また彼等に曰けるハ燈を持來りて斗の下ある
 ひハ牀の下に置るの有んや之を燭臺の上に置らむ乎 二三
 隠て明瞭にあらざるハあく藏て露れざる者ハあし 二三 耳あ
 りて聽ゆる者ハ聽べし 二四 また彼等に曰けるハ聽ところを
 慎めよ兩曹が度る所の量をもて兩曹も度らるべし聽たる
 兩曹にハあ不加られん 二五 それ有る者ハあ不與られ無有者
 ハ有る物をも取る也 〇 二六 また曰けるハ神の國ハ人種を
 地に播が如し 二七 日夜起臥せる間に種をえいで成長ども
 其然る故を知き 二八 それ地ハ自うら實を結ぶものにして初
 にハ苗ゆぎに穂いで穂の中熟したる穀を結ぶ 二九 既に熟
 は穫時いたるに因て直に鎌を入さする也 〇 三十 また曰ける

ハ神の國ハ何に比へ何の譬を以て之を喻ん 一粒の芥種
 のおとし之を地に播るときハ百様の種より微けれど 既に
 播て萌出れば百様の野菜よりハ大くかり巨ある枝を出し
 て空の鳥の蔭に棲ほとに及あり ○ イエス彼等の聽得
 どころに循ひ多かゝる譬をもて教を彼等に語れり 譬に
 非ざきは彼等ハ語らきイエスらの弟子と共に居るとき彼
 等ハ悉く之を解聽せり ○ 偕うの日の夕暮イエス彼等ハ
 向の岸ハ濟れと曰けきは弟子たち衆人を歸らせイエス
 の舟ハ在しを其まゝ之と偕ハ濟れり又他の小舟もともハ
 往り 時に颶風おこり浪うちこみて殆ど舟ハ滿 イエス
 箱のかたハ枕して寝たりしが弟子かれの目を醒して曰け

るハ師よ我儕が溺るゝをも顧み給えざる乎 イエス起て
 風を斥め且海ハ靜りて穩うハ爲と曰けきは風やみて大に
 和たり 斯て彼等に曰けるハ何故かく懼るゝや爾曹あん
 ど信ふき乎 彼等甚しく懼き互ハ曰けるハ風と海さへも
 順ふ是誰あるぞ耶

第五章

かれら海を濟てガダラ人の地ハ着 舟よりイエス
 の上をるとき惡鬼に憑れたる人たゞちハ墓間より出て彼
 に遇フこの人ハ墓間を居處とせり屢次桎梏と鍵をもて繫
 ども鍵をうちきり桎梏を打碎により之を繫うる者あく亦
 誰も之を制し得もの無りき 夜も晝も恒に山と墓間に於
 て喊叫また石をもて己が身に傷つけぬ 彼をるかにイエ

スを見て趨ほりより之それを拜ほいし 七 大聲おほこゑに呼よびりけるハ至上いざたか神かみの子こ
 イエスよ我われあんぢど何なんの與かいはり有あんや我われ神かみよ託よりて求ねがふ我われを
 苦くるむること勿なき 八 是それイエス惡あく鬼きよ人ひとより出いでよと曰いひしよ因より
 てあり 九 イエス彼かれに爾なんぢの名なハ何なんと問とひしに答こたへるハ我われ儕らお
 ほきが故ゆゑに我われ名なをレギヨンと云いふ 十 切きりに此この土地ちより我われ儕らを
 逐た出す勿なれどイエスよ求ねがたり 十一 茲ここに多おほくの豕ぶたの群むれ山やまに草くさを
 食くひふたりしが 十二 凡すべての惡あく鬼きかれに求ねがて我われ儕らを遣おくり豕ぶたに入いせ
 よと曰いひけきは 十三 イエス直ただに彼かれ等らに許ゆるせり汚けがれる鬼おふその人ひと
 より出いでて豕ぶたに入いりは約おほそ二千せん匹びきほとどの群むれをゆしく馳かけ
 だり山が坡けより海うみに落おちて海うみよ溺おぼれぬ 十四 牧か者ふども逃にゆきて此この事こと
 を邑まちまた郷むら村くよ告つげけきは衆ひと人ら其そのありし事ことを視みんとて出いで 十五

イエスに來きりて惡あく鬼きよ憑つかれたる者ものをふハちレギヨンを持もち
 たりし人ひとの衣き服ふくをつけ慥たしかなる心こゝろにて坐まじ居ゐけるを見みて懼おそれ
 あへり 十六 此事このことを見みし者ものども惡あく鬼きに憑つかれたりし者ものの事ことと豕ぶた
 の事ことを彼かれ等らに告つげけきは 十七 頓やがてイエスに其その境さかひを出いでんことを
 求ねがぬ 十八 イエス舟ふねに登のらんとせしとき惡あく鬼きに憑つかれたりし者ものども
 に居まることを求ねがけきども 十九 イエス許ゆるぎして彼かれに曰いひけるハ
 爾なんぢの家いへに歸かへり親あんぢ屬くに往ゆて主まの爾なんぢに行いし大おほいなる事ことと爾なんぢを恤あはれ
 みし事ことを告つげよ 二十 彼かれゆきてイエスの己おのれに行いたまへる大おほいなる
 事ことをデカボリスに言い揚あげしければ衆ひと人らみな駭おそろろきあへり 〇
 イエス舟ふねに乗のりて復また海うみの彼あなとに濟わりしに大おほ勢せいの人ひと々々彼かれに集あつまる
 イエスハ海うみに近ちかくをれり 二二 會く堂いの宰つかヤイロといふ人ひときたり

イエスを見て其足下に伏キ切々に求ネいひけるハ我ワいどけ
 おき女オンナ死シる瀕ヒカリにありぬ之ノを救スん爲タメに來キりて手テを彼カレに按オた
 まへ然サは女メハ生イクべし二四 イエス彼カレと共トモに往ユクとき衆多オホシの人々ヒト
 彼カレに従スひて擁オあへり二五 爰ココに十二年ニニ血漏チロウを患ワつらひ二六
 此婦コノオンナおほくの醫者イシヤの爲タメに甚ハだ苦クめらき其所有ソノモトをも盡ツく費ツヒ
 しけきとも何ナニの益カヒもあハく轉カつて惡アクかりしが二七 イエスの事コトを
 聞キて群集グンシユの中ナカより彼カレの後ウシロに來キその衣オロモに捫サはり二八 是コレの衣オロモ
 にだに捫サらはハ愈タるべしと日イハはハり二九 斯カクて血チの漏イつること直タチ三〇
 にどまり既スに疾ヤいえしと其身ソノミに覺オたり三〇 イエス自オノら能チ力カラ
 の已オノレより出イたるを知チおほせいの人々ヒトを顧カみて日イハけるハ我ワ
 衣オロモに捫サりし者モノハ誰タレある乎カ 三一 弟子シシかきに日イハけるハ群集グンシユの人ヒト

々トの爾オンチに擁オあふを見て我ワレに捫サりし者モノハ誰タレぞと日イハたまふ乎カ
三二 イエスこの事コトを行ナす婦オンナを見ミんと環視カンシしければ三三 婦オンナおそ
 れ戰慄センリツおのが身ミにせられし事コトを志シり來キて彼カレの前マヘに俯伏フツフツこ
 どく三四 實情ジツシヨウを告ツク イエス彼カレに日イハけるハ女メよ爾オンチの信シンあ
 ちを救スり安ヤス然ゼンにして往ユクかんちの疾ヤいゆべし三五 イエスこ
 の事コトを言イハるうちウチに會堂クワイダウの宰ツカサの家イヘより入ヒト々ト來キりて日イハける
 ハ爾ナンチの女メすでニ死シたり何ナンぞ師オを煩ワらす乎ヤ 三六 イエス直タチ三に其ソノ
 告ツクる所トコロの言コトをきく會堂クワイダウの宰ツカサに日イハけるハ懼オウるく勿ナかれ三信シンせ
三七 イエスペテロとヤコブ及オその兄弟ケイテイヨハ子の外ソノハ誰タレに
 も共トモに往ユクことを許ゆるさハりき三八 既スに會堂クワイダウの宰ツカサの家イヘに來キりて
 人々ヒトの忙亂サマシいたく哭泣クキを見るミ 三九 入イて彼等カレに日イハけるハ何ナンぞ

忙亂さまざまかつ哭なくや女むすめハ死おほるに非あらたゞ寢いねたる耳のみ 彼等かれら イエスを
 哂笑あざわらふイエス凡すべての人々ひとを出いだし女むすめの父母ちちははどうの従したがへる者等ものども
 を率ひきつれ女むすめの臥ふしたる所ところに入いり 女むすめの手てを執とりて之これに曰いひけるハ
 タリタクミ之これを譯とは女むすめよ我われあんちに命いのち起おこよといふ義ぎあ
 り 直ただに女むすめおきて行あゆめり彼かれハ年とし十二に歳さいあり彼等かれらはあえだ
 駭おどろきぬ 四三 イエスこの事ことを人ひとに知あする勿なれと嚴きびく戒いまめ又また女
 に食物あじふを與あたよと命いのちじたり

第六章

イエス此こを去さりて故郷ふるさとに到いたりしに其その弟子でしも彼かれに從したがひぬ
 安息日あんそくにちに及およびければ會堂くわいどうにて教ををえじむ衆人ひとこれを聞きて
 奇あやミ曰いひけるハ如何いかして此人このひとに斯かくの如ごとき事ことあるハ誰たれより此この
 智慧ちゑを授さづけられて如此かくふしぎある事わざをも其手そのてより行なか 三 彼
 二 安息日あんそくにちに及および

ハ木匠たくみに非あらマリアの子こヤコブヨセユダとシモンの兄弟きやうだい
 にして其その姉妹あimaiも此こに我儕われらと共に在あるに非あらキヤ遂つひに人々ひとかれ
 に礙つまづけり 四 イエス彼等かれらに曰いひけるハ預言者よげんハろの故郷ふるさとろの
 親戚おんせきろの室家むすめの外ほかに於おいてハ尊たよはれざることをあし 五 イエス彼
 處こゝにて患者わづらふものに手てを按つけたゞ數人すにんを醫いはし外ほかふしぎある事わざを
 行なすこと能あたりき 六 また彼等かれらの信あんせざるを奇あやみ遂つひに諸郷むろを
 經巡へめぐりて教ををあせり 七 イエス十二にの弟子でしを召よびて彼等かれらを二
 人ふたづと遣つかはさんとして之これに惡鬼あくまを逐出おひだせ權威けんいを授さづけ 八 且またか
 れらに命いのちじけるハ一の杖つゑの外ほかハ旅たびの用意よういに何なにをも携もぶ
 れ旅袋たびぶくろ糧食くひものまた金かねをも携もぶ 九 たゞ履くつをはき二の衣ころもをきる
 勿なれ 十 また彼等かれらに曰いひけるハ何處いづこにても人ひとの家いへに入いらばうの

所を去まてハ其處に居 凡て爾曹を接きあんぢらに聽さ
 る者ハ其處を去とき證のため足下の塵を拂へ我まこと
 に爾曹に告ん審判の日いたらはソドムとゴモラハ此邑よ
 りも却て易かるべし 弟子たち出て人々に悔改む可こと
 を宣傳へ 十三 また多の惡鬼を逐出し又多病る者に膏を沃
 て醫しぬ ○ 十四 イエスの名播りければヘロデ王これを聞て
 曰けるハバプテスマを施しヨハ子死より甦れる故に奇
 異なる能をあす也 或人ハ之をエリアありといひ或ハ往
 昔の預言者の如き預言者なりと曰 十六 ヘロデ之を聞て曰け
 るハ是わが首斬し所也ヨハ子也かれ死より甦りたる也 十七
 義にヘロデラの弟兄ピリポ也妻ヘロデヤの事に因て人を

遣しヨハ子を捕て獄に繋けり蓋ヘロデが彼の婦を娶しを
 十八 ヨハ子諫て爾兄弟の妻を納ハ宜からざと曰るよ因て也
 十九 ヘロデヤ彼を怨て殺さんと欲しかと能ざりき 二十 ヘロデ
 ハヨハ子を義かつ善ある人と知て彼を敬ひ彼を保護かれ
 よ聞て多の事を行ひ且喜びて彼も聽ことをせり 二一 斯てヘ
 ロデその誕生の日もろくの大員千人の長およびガリラ
 ヤの尊き人々よ享宴をさせる機會の日いたりけきは 二三
 ロデヤの女きたりて舞をあしヘロデと其席に列れる人々
 を樂ましむ王の女よ曰けるハ何にてを我も求へ爾が望
 ところの者ハ我あんぢよ與ふべし 二四 又彼も凡る爾が求る
 ものハ我が領分の半よ至るとも爾も與んと誓ふ 二五 女いで

其母そのははも何を求ねがふべき乎かと曰いひければ母乃ははちバプテスマのヨ
 ハ子このこが首くびと曰いへり二五 女むすめたぢちよ急いそぎ王わうよきたり求ねがふてバプテ
 スマのヨハ子このこが首くびを盆ぼんよ載のせて即時すまやかよ我われよ賜たまへと曰いふ 王わう甚はなは
 だ憂うれへけれども既すでよ誓ちかひたると同席どうせきの者ものの故ゆゑとをもて之これを拒こは
 むことばを欲ほき二七 王わうたぢちよヨハ子このこの首くびを携もち來きれと命めいじて
 兵卒へいそうを遣つかはしけきは彼かれゆきて獄ひびやよ於おいて之これを斬きり 其首そのくびを盆ぼんよ
 のせ携もち來きりて女むすめよ與あそぶ女むすめハ之これを其母そのははよ與あそぶたり二九 ヨハ子この
 弟子でし等たちこの事ことを聞きて來きり其屍そのまがはねを取とりて墓ほかよ葬ほうむりぬ三〇 使徒しと
 等たちイエスよ集あつりて行いへる事ことと教し事こととを悉まことく彼かれよ告つ 三二
 エス彼等かれらよ曰いひけるハ兩曹衆なんぢらひせうを避まげて我われと偕ともよ暫あきらく寂さび寞しとこ
 ろに往ゆて休やすむべし是往來これゆきのもの多おほくして食あそむ暇ひまも無なかりし

が故ゆゑあり三三 かれら人を避まげ舟ふねにて寂さび寞しところよ往ゆり三三 其往ゆ
 を見みて衆人ひとおなくイエスを志こころり諸邑むらより歩あ行ちよて趨はり彼かれ
 等らの往ゆんとする所ところへ先さきち往ゆてイエスよ集あつれり三四 イエス
 出いて多おほくの人ひとを見みる彼等かれらハ牧者かふものあき羊ひつじの如ごとき者ものあるよ因より
 之これを憫あはれ三六 許多さまの事ことを教しはじめぬ三五 時ときをてよ暮景くれがたよありけ
 れは其弟子そのでしかれよ來きいひけるハ此こゝハ寂さび寞しところにして時とき
 も既はや晩むすし三六 衆人ひとの食くらふべき物ものあきが故ゆゑよ其自そのみづから四あ周しりの郷むら
 村むらよ往ゆてパンを市まどめんが爲ためよ彼等かれらを去さらしめ給たまへ三七 イエス答こたへ
 けるハ兩曹なんぢらこれよ食あそむと與あそぶ弟子でしかれよ曰いひけるハ我われ儕らゆき
 て銀ぎん二百にひやくのパンを市かひかきらよ與あそぶて食くらしむ可べき三八 イエス彼かれ
 等らよ曰いひけるハパンハ幾いくつ何なある往ゆて視みよ彼等かれらみて其數そのかずを志こ

り五のパンと二の魚ありと答ふ三九 イエス衆の人を組々に
 して青草の上よ坐しめよと命じけきは四十あるひ 或ハ百人或ハ五
 十人づゝ列坐せり四一 イエスその五のパンと二の魚をとり
 天を仰ぎ謝してパンをわり弟子よ與て人々の前よ陣しむ
 又二の魚を每人よ分與ぬ四二 衆人みあ食て飽四三 そのパンと
 魚の餘屑を拾しよ十二の筐よ盈たり四四 パンを食たる男お
 よそ五千四五人ありき ○ 直よイエスろの弟子を強て舟よ乗
 むかふの岸あるベツサイダへ先わたらしめ己ハ衆人を歸
 しむ四六 衆人を歸しくのち祈禱の爲よ山よ往り四七 日暮て舟
 ハ海の中よ在イエスハ獨り陸よ居り四八 風逆ふよ因て弟子
 等の舟を棹よ勞たるを見て曉の四時四九おろイエス海の上を

履きたり彼等を過んどせしよ四九 弟子ろの海を履るを見て
 變化の物あらんと意ひ叫びたり五十 蓋弟子みな之を見て懼
 しが故なりイエス直よ彼等よ語りて曰けるハ心安かれ我
 なり懼るゝこと勿れ五一 遂よ舟よ登しかば風やまぬ彼等心
 の中よ駭き異めること甚だじ五二 是ろの心の愚頑よ因てパ
 ンの奇跡をも覺ざりし也 ○ 既よ濟ゲ子サレといふ地よ
 到て舟泊せり五四 彼等舟より出しよ頓て人々イエスを知て
五五 遍く其四方の地へ馳ゆき病る者を床の儘よて昇ひイエ
 スの在を處々を聞出して之よ就り五六 凡ろイエスの至ると
 ころ或ハ郷あるひハ邑あるひハ村ろの街市よ病る者を置
 て彼よ其衣の裾にだよ捫らせ給へと求め乃ち捫るおどの

者ハみな愈たり

第七節 パリサイの人と或學者たちエルサレムより來りて

イエスの前ニ集り 彼の弟子の中ニ潔らざる手即ち盥を

る手にてパンを食むる者ありしを見て之を責めたり 蓋

パリサイの人とユダヤの人々ハモナ古の人の遺傳を守り

て其手を潔あらえざれば食せき 市より歸きたりて盥を

きは亦食せき此ほう杯碗鍋および牀を洗ふと多端の遺傳

を受守をり 是は於てパリサイの人と學者等イエスニ問

けるハ爾の弟子ハ何ゆゑ古の人の遺傳ニ遵をきして盥を

る手を以てパンを食する乎 イエス答て彼等ニ曰けるハ

イザヤハ偽善者なる爾曹を指てよく預言せり其録しく言

よ此民ハ唇にて我を敬へども其心ハ我ニ遠かり 人の誠

を教と爲て徒らよ我を拜すと曰り 夫なんぢらハ神の誠

を棄て人の遺傳を守をり即ち銅杯を洗おなく此の如き事

を行ふ また彼等ニ曰けるハ爾曹ハ實己の遺傳を守ん

どて能も神の誠を棄る者あり モーセ曰けるハ爾の父母

を敬へ又父あるひハ母を罵る者ハ殺るべしと 然と爾曹

ハ曰もし人父あるひハ母ニ對て爾を養ふべき物のコルバ

ン即ち禮物ありと曰は事きども可と 而して人の其父あ

るひハ母の爲何をも行事を爾曹許き 斯なんぢらハ其

教る所の遺傳をもて神の道を廢うす又おなく此類の事を

行ふ ○ イエスまた衆庶を召て彼等ニ曰けるハ爾曹みあ

我言を聴て悟れ 外より人よ入ものハ人を汚すこと能え
 き然と人より出るものハ人を汚す也 聴ゆる耳ある者ハ
 聴べし ○ イエス衆庶を離れて室よ入し其弟子たどへ
 の意を問ければ 彼等よ曰けるハ爾曹もか不悟ざる乎 凡
 そ外より人よ入もの、人を汚し能えざる事を知ざる乎
 蓋その心よ入き腹よ入て厠よ遺すなえち食ふ所のもの潔
 れり 又曰けるハ人より出るものハ是人を汚も 人の心
 より出るものハ惡念姦淫苟合兇殺 盜竊貪婪惡慝詭譎好
 色嫉妒謗譏驕傲狂妄あり 是等の惡行ハみち内より出て
 人を汚すもの也 ○ イエス此を去てツロとシドンの境よ
 ゆき家よ入て人よ知れざらん事を欲しが隠れ得ざりき

ろと惡鬼よ憑たる幼き女を有る婦イエスの事を聞て來り
 其足下よ伏たるよ因てあり この婦ハサイロピニシヤよ
 生れしギリシヤの者ありしが惡鬼を其女より逐出し給え
 ん事をイエスよ求り イエス彼よ曰けるハ先兒女よ飽し
 むべし兒女のパンを取て犬よ投るハ善らき 婦こたへて
 曰けるハ主よ然されと犬も案の下よ在て兒女の遺屑を食
 ふ也 イエス婦よ曰けるハ此言よ因て歸れ惡鬼ハ爾の女
 より出たり 婦の家よ歸し惡鬼既よ出て女の牀よ臥
 たるを見る ○ イエスツロとシドンの地を去てデカポリ
 スの地を過ガリラヤの海よ至れり 人々壘の訥る者をイ
 エスよ携來りて手を按給えん事を求めければ イエス衆人

を離れ之を外三三に携つれゆき指ゆびを其耳そのみみよさしいれ又唾またつばきして其舌そのあしを捫さばり三四且天かつてんを仰あふぎて嘆たんじ其人そのひとよ對むかひてエツバタと曰いふこれを譯せひは啓ひらけよとの義ぎあり三五直ただよ其耳そのみみひらけ舌あしの絡すぢゆるもて正ただしく言ものいへり三六イエス之これを人ひとよ告つぐる勿なれと彼等かれらを戒いまいむれば戒いまいむるやと益言ますくひひ揚あじぬ三七衆人ひともあそだしく駭おどろきて曰いひけるハ此人このひとの行ゆし所ところごとくく善よあるひハ聾つんばを聽きえさせ或あるひハ啞おふ者を言ものいえしめたり

第八章

當時そのころあつまれる人々ひと甚おほだ多おほりしが何なにの食物あふくもつも有あざりければイエス其弟子そのでしを召よびて曰いひけるハ二我われこの多おほくの人々ひとを憫あはれむ既すでよ三日みつかわれと共ともに居まりしゆいまも今いまなよも食物くらふものおし三もし飢うしまよ其家そのいへよ歸かへさは途間みちまにて憊なやん其中そのうちよ遠處とほより

來きれる者ものあれば四その弟子でしかれよ答こたへるハ此野こののにて何處いづこよりパンを得えこの人々ひとを飽あめん乎や五 イエス彼等かれらよ問とけるハパン幾何いくつあるや七と答こたふ六 イエス人々ひとよ命めいじて地ちよ坐ませしめ七のパンを取とり謝あやし之これをわり人々ひとの前まへに陳あめんが爲ためその弟子でしよ與あけよは即すなはち人々ひとの前まへに陳あり七また小ちひき魚うを些須わづかばかりもてり之これをも祝あむして人々ひとの前まへに陳あり八人々ひとこれを食くらひ飽あきその餘屑くづを七の籃かごよ拾ひろり九 之これを食くらる者ものおおよそ四千人あせんあり乃すなはちイエス之これを歸かへしぬ十 イエス直ただよ其弟子そのでしと共ともに舟ふねよ乘のりてダルマヌタの方かたに往ゆし十一バリスイの人ひといで彼かれを試こころみんがため天てんよりの休徵あるを求もとめて詰なじむ十二 イエス心こころの中うちに深ふかく歎息たん息うじて曰いひけるハ此世このよの人ひと

さんぞ休徴あるしを求もとむるや誠まことに我われなんぢらよ告つげん休徴あるしハ此世このよの
 人ひとよ必かならずき與あそへられじ十三 イエス彼等かれらを離はなれて復また舟ふねよ乗のりむかふ
 の岸かきよ濟わたれり十四 ○ さて弟子でしパンを携たづふることを忘わすれたひとつ
 のパンのモ舟ふねよ有ありき十五 イエス彼等かれらを戒いまめて曰いひけるハ戒心こころ
 じてバリサイの人の麩ぼん酵だぬどへロデば麩ぼん酵だぬを慎つしめよ十六 弟子でし
 たがひよ論ろんじて曰いひけるハ是これパンを携たづへざりし故ゆゑあらん十七
 イエス之これを知しりて彼等かれらよ曰いひけるハ何なんぞ互たがひよパンを携たづへざり
 じ事を論ろんぎるや未いまだ悟さとらるる爾曹なんぢらの心こころか頭にぶきか十八 目めあり
 て視みざるう耳みみありて聽きえざる乎かまた覺おぼざる乎か 我われ五ご千人せん
 五いつのパンを擘わりあたへし時ときその餘屑くづを幾いく筐かひひろひしや答こた
 けるハ十二じふになり二十 又また四よ千人せんに七ななのパンを擘わりあたへし時とき

の餘屑くづを幾いく筐かひひろひしや答こたへるハ七ななあり二二 イエス彼等かれらに
 曰いひけるハ何なんぞ悟さとらるる乎や ○ 二三 イエスベツサイダいよ至いたりければ
 人々ひと聾め者を携つれ來きりて之あれよ手てを按つたまはん事まじを求ねがへ二三 イエ
 ス聾め者の手てを執とりて村むらの外うへへ携つれ出いでその目めよ唾つばじて手てを彼かれよ
 按つどひけるハ何なんか視みるや二四 聾め者め目めを舉あげて曰いひけるハ我われこの
 人々ひとの歩ある行くを見みる樹きの如ごとし二五 遂つひよイエスマた兩手りやうてを彼かれの
 目めよ按つその目めを舉あげさせければ乃すなはち愈いて庶物すてのものあきらかよ視み
 たり二六 イエス彼かれを其家そのいへよ歸かへらせ曰いひけるハ此村このむらよ入いるかかれ
 且まこの村人むらびとよも告つる勿なれ ○ 二七 イエスらの弟子でしよ共ともよカイ
 ザリヤビリの諸村むらへゆく途間みちにて其弟子そのでしよ問とて曰いひける
 ハ衆人ひとハ我われを曰いひて誰たれとぞる乎か 二八 答こたへるハ或人あるひとハバプテス

マのヨハ子ある或人ひとハエリヤある或人ひとハ預言者よげんの一人ひとりありと曰いり
二九イエス彼等かれら曰いけるハ爾曹なんぢらハ我われを曰いて誰たれとする乎かベテ
一口答こたへけるハ爾なんぢハキリストありあり三三イエス彼等かれらを戒いまめて我事わがま
を誰たれにも告つぐる勿なかれと命めいじたり○三二また人ひとの子この必かなき多おほく
一苦難くるしみをうけ長老祭司ちやうじうさいの長まさ學者がく者やども棄すられ且かつ殺ころさきて三
日かの後のち曰いけることを彼等かれら示あめし始はじめたまへり三二明あきらか
一し給たまひしかはベテロイエスを援ひきて諫いさめんとせしよ三三イエス回かへ
顧かへりその弟子でしを見てベテロを戒いまめ曰いけるハサタンよ我後わがうしろ
一退まりけ爾なんぢハ神かみの情こころを思おもひ反かへて人ひとの情こころを思おもふ○三四衆人ひとと其弟ま
子こを共ともに召よびて彼等かれら曰いけるハ若もし我われ曰いて從まそんと欲おもふ者ものハ
一已おのれを棄すての十字架おふじを負おひて我われ曰いて從まそへ三五そハ生命いのちを全まつせん

とす者ものハ之これを喪うひ我われため且ま福音ふくいんの爲ために生命いのちを喪うふ者ものハ
之これを得うべければ也なり三六もし人ひと全世界せかいを得うるとも其生命いのちを喪うふ
一何なんの益えきあらん乎や三七また人ひと何なんをもて其生命いのち易かへんや三八姦かん
一惡あくある此世このよに於おいて我われと我道わがみちを恥はづる者ものは人ひとの子こも亦また聖使せいし
と共ともに父ちちの榮光はうこうをもて來きる時とき之これを恥はづべし

第九章

イエスマた彼等かれら曰いけるハ我われまこと曰いふハ爾曹なんぢら告つげ
此こに立たつもの中うちに神かみの國くにの權威けんいをもて來きるを見みるまでハ死あら
一ざる者ものあり○二さて六日むいかの後のちイエスベテロヤコブヨハ子
を伴ともひ人ひとを避さげ高山たかみやまに登のぼり給たまひしが彼等かれらの前まへにて其容そのすがた貌がた
一かえり三其衣そのころもかゞやき白しろこと甚はだしくして雪ゆきのおどく世よ
上うへの布ぬの漂さらも斯かくまろくハ爲能なりあえざるべし四エリヤとモーセ

ど共どもよ彼等かれらよ現あられてイエスと語かたをきり五 ベテロ答こたてイエ
 スよ日ひけるハラビ我われ儕らこよ居まハ善よわれらに三みつの廬いほりを建つく
 せ給たまへ一ひとつハ主あめのため一ひとつハモ―セのため一ひとつハエリヤの爲ためよ
 せん六 此こハ其謂いふどころを知ありしあり彼等かれらいたく懼おそしよ
 因よ七よ斯かくて雲くも彼等かれらを蔽おほひ聲こゑ雲くもより出いて日ひけるハ此こハ我わが愛あい
 子こなり之これよ聽きべし八 頼たのて弟子でし環視かんしければイエスと己おのれの外ほか
 ハ一人ひとりをも見みざりき九 山やまを下くだる時ときよイエス彼等かれらよ命いのちじ
 て子この死しより甦よみがへる迄までハ兩曹なんじやうの見みし事ことを人ひとよ告つる勿なれと日ひ
 十よ弟子等でしこの言ことばを守まもり十一 互たがひよ論ろんじ日ひけるハ死しより甦よみがへ
 十一よ云いハ何なにの事ことハ彼等かれらイエスよ問まて日ひけるハエリヤハ前ま
 十二よ來きるべしと學がく者しゃの曰いるハ何なにぞや十二 イエス答こたて日ひけるハ

實けよエリヤハ前まよ來きりて萬事ばんじを復振あたらまた人ひとの子こよ就つてハ
 其各樣そのさまの苦難くるしみを受うかつ輕慢かうめんらるゝ事ことを書かき十三されたり
 然さと我われふんぢらよ告つん十四 エリヤ既すこよ來きしよ彼かれよ就つて錄あされ
 たりし如ごとく人々ひと意いの任まよ之これを待まちへり十四 イエス弟子等でしの
 所ところよきたり多おほくの人々ひとの彼等かれらを環圍めぐりると學がく者しゃたち十五の彼等かれらと
 論ろんじをりしを見みたり十五 衆人しゆじんたぢよ彼かれを見て駭おどき趨はより
 て禮れいをふせり十六 イエス學がく者しゃよ問まけるハ弟子でしと何事なにごとを論ろんじ
 る乎や十七 衆人しゆじんのうち一人ひとりこたへけるハ師あしよ我われものいハぬ惡あく
 鬼おによ憑つきたる我わが子こを兩ふたよ携つ來きれり十八 惡鬼あくおにの憑つき時ときハ彼かれ傾か跌たふ
 さき沫あきをふき齒はを切きて疲勞つかえつる也なりこきを逐出おひさん十九 こと
 を我われなんぢの弟子でしよ請ましかと彼等かれら能あたりき十九 イエス彼等かれら

よ答て曰けるハ噫信なき世ある哉いつまで我ふんぢらと
 共ニ在んや何時まで我ふんぢらを忍んや彼を我ニ携來れ
 二千 彼等の子を携來りしハ惡鬼イエスを見て忽ち彼を拘
 擥しむ彼地ニ仆を輾轉て沫を出ぬ 二二 イエス父ニ問け
 るハ幾何時より如此ありしや父いひけるハ少時より也 二三
 惡鬼志はく之を火の中あるハ水の中ニ投入て殺んど
 せり爾もし爲ことを得ば我儕を憫ミて助よ 二三 イエス彼ニ
 曰けるハ爾もし信ける事を得ば信ける者ニ於て爲あたを
 ざる事あり 二四 其子の父たぢちハ聲をあけ涙を流して曰け
 るハ主よ我信け我が信なきを助たまへ 二五 イエス衆人の趨
 集るを見て惡鬼を叱いひけるハ啞にして聲ある惡鬼よ我

かんぢよ命を出て再び之ニ入らる 二六 惡鬼さけびて大ニ
 彼を拘擥しめて出しかは彼死たる者の如かりぬ人々これ
 を己ニ死りと云 二七 イエスその手を執て扶ければ彼たてり
 〇 二八 イエス家ニ入し其弟子ハそかニ問けるハ我儕こそ
 を逐出こと能ざりしハ何故ぞ 二九 イエス彼等ニ曰けるハ此
 族ハ祈禱と斷食ニ非れば逐出こと能ざる也 〇 三十 彼等こ
 を去てガリラヤを過この事をイエス人の知を欲ざりき 三一
 蓋の弟子ニ教て人の子ハ人の手ニ付され彼等ニ殺され
 殺さきてのち第三日ニ甦るべしと曰たまふが故あり 三二 其
 とき弟子等この言を曉らき亦問ことを恐たり 〇 三三 偕イエ
 スカペナウンニ至り室ニ居て弟子ニ問けるハ爾曹途間に

て何を互たがひに論ろんせし乎や 弟子でい黙然もくねんたり是途みち間まにて互たがひに論ろんじ
 誰たれも大おほいからんとどの争あつひありければ也なり イエス坐まして其その十二に
 を召よびかれらよ曰いひけるハ若もし首かしらたらんと欲おもふ者ものハ凡すべての人の
 後あととあり且またすべての人の使役つかはれびととあらん 三六 また孩提こどもを取とり
 彼等かれらの中なかよ立たてて之これを抱いだき彼等かれらよ曰いひけるハ 凡すべてそ我名わがなの爲ため
 斯かくのおどき孩提こどもの一人ひとりを接うける者ものハ即すなはち我われを接うけるあり又
 わきを接うける者ものハ即すなはち我われを接うけるよ非あらき我われを遣つかはし、者ものを接うける
 あり ○ 三八 ヨハ子こ彼かれよ答こたへて曰いひけるハ師あしよ我われ儕らよ従したがハざる者もの
 の爾なんぢの名なよ托よりて惡鬼あくきを逐おひ出いだせるを見みしが我われ儕らよ従したがハざる
 故ゆゑこれを禁とがめたり 三九 イエス曰いひけるハ其人そのひとを禁とがむる勿なかき蓋うへわが
 名なよより異ちがひある能わざを行おこなひて輕易かろしく我われを誹うり得うる者ものハあら

じ 我われ儕らよ敵てきをざる者ものハ我われ儕らよ屬つ者ものあり 四一 爾曹なんぢらをキリス
 トよ屬つ者ものとして我名わがなの爲ためよ一杯いちばいの水みづにても爾曹なんぢらよ飲のみする
 者ものハ我われまことよ爾曹なんぢらよ告つげん其人そのひとハ賞むくいを失うしなハざる也なり 四二 また
 凡おほそ我われを信まんんる小子ちひさきものの一人ひとりを礙つまづする者ものハその首くびよ磨ひきを懸かけ
 らきて海うみよ投入いれられん方かたうの人の爲ためよあ善よかるべし 四三 若も
 し爾なんぢの一手かたてあんちを礙つまづうさは之それを斷きりさき爾手りやうてありて地獄ぢごく
 すあそち滅きざる火ひよ往ゆんよりハ殘缺かたはにて永生いのちよ入いるハ爾なんぢの
 爲ためよ善よきこと也なり 四四 彼處かゝこよ入いるものゝ蟲うじつきき火ひきえき 若もあ
 んちの一かず足あしあんちを礙つまづかさば之それを斷きりされ爾足りやうあしありて地獄ぢごく
 すあそち滅きざる火ひよ投入いれられんよりハ跛あしにて永生いのちよ入いるハ
 爾なんぢの爲ためよ善よきあり 四六 彼處かゝこよ入いるものゝ蟲うじつきき火ひきえき 四七 も

し爾の一眼なんぢのひとみを礙つまづかさば之それを扶たすいだせ兩眼りやうがんありて地獄じよくの火ひに投入なげいれられんよりハ一眼ひとみにて神かみの國くにに入いるハ爾なんぢの爲ために善よきあり四八彼處かゝこに入いるものゝ蟲うじつききき火ひきえき四九蓋うへすべての人の鹽あはをつくる如ごとく火ひを以もてせらる凡すべの祭物まつりものの鹽あはをもて鹽あはにつけらる五十鹽あはハ善よきものあり然されと鹽あはもし其味そのあじを失うしえど何をもちて之それの味あじを加つけんや爾曹なんぢら心中こころの中うちに鹽あはを有たて又またたがひよ睦むつと和やはらむべし

第十章

イエス此こゝを去さりヨルダンの外むかふを経てユダヤの境さかいの内うちに來きしよ多おほくの人々ひとびとまた彼かれは集あつりければ恒つねの如ごとく彼等かれらは教き誨をを爲なすまへり二パリサイの人ひと來きて彼かれを試あし問とけるハ人ひとの妻つまを出いすハ可よか三答こたへて曰いけるハモーセハ爾曹なんぢら何なと

命いのちせし乎や四 彼等かれら曰いけるハモーセハ離縁りんげん狀じやうを書與かきあへて之それを出いすことことを許ゆるせり五イエス答こたへて彼等かれら曰いけるハモーセ爾曹なんぢらの心こころつとまきよ因よて此命このいのちを爲なす也なり六 然されと開闢かいびやくの元もとに七神人かみひとを男女なんにん造つくり給たまへり七是故ゆゑに人ひとハ其の父母ちちははを離はなるの妻つまと合あひ八二人ふたりの一體いつたいと成なるべし然されは二ふたにハ非あらき一體いつたいなり九是故ゆゑに神かみの耦むすせ給たまへる者ものハ人ひとこれこれを離はなすべから十室むろに在ありて弟子等でしまた此事このことを問とければ十一イエス彼等かれら曰いけるハ凡おほろ其妻そのつまを出いして他ほかの婦めを娶めとる者ものハ其妻そのつまと對たいして姦淫かんいんを行おこなふあり十二また婦めもし其夫そのせつとを出いして他ほかに嫁よめが十三此婦このめも姦淫かんいんを行おこなふあり十三イエスよ撫なれんがため人々ひとびと孩提こゝろを携つれ來きければ弟子等でしの携つれ來きる者ものを責いめたり十四イ

エス之を見^みて怒^{いかり}を合^あかれら^らは日^{いひ}けるハ孩提^{こども}を我^{われ}も來^{きた}せよ
 彼等^{かれら}を禁^いる勿^なれ神^{かみ}の國^{くに}は居^ゐるのハ斯^{かく}の如^{ごと}き者^{もの}あり十五誠^{まこと}は
 我^{われ}なんぢら^らは告^{つげ}ん凡^{おほ}う孩提^{こども}の如^{ごと}くは神^{かみ}の國^{くに}を承^{うけ}ざる者^{もの}ハ
 之^{これ}は入^いることを得^えざる也^{なり}即^{すなは}ち彼等^{かれら}を抱^{いだ}て手^てをうの上^{うへ}は按^お
 此^{これ}を祝^あせり○十七 イエス途^{みち}は出^いけるは一人^{ひとり}はしり來^{きた}りて
 跪^{ひざま}き問^とけるハ善^よ師^しよ我^{われ}かぎりあき生命^{いのち}を嗣^{つぐ}ためは何^{なに}を行^な
 べき乎^か イエス彼^{かれ}は日^{いひ}けるハ何^{なん}ぞ我^{われ}を善^よと稱^いや一人^{ひとり}の外^{ほか}
 は善^よ者^{もの}ハあし即^{すなは}ち神^{かみ}あり十九 誠^{まこと}ハ爾^{なんぢ}が識^しるところなり姦^{かん}淫^{いん}す
 る勿^なれ殺^{ころ}さうれ盜^{ぬす}まかき妄^{いつはり}の証^{あかし}を立^たつ勿^なれ拐^{あざむ}騙^まさかれ爾^{なんぢ}
 の父^{ちち}と母^{はは}を敬^{うやま}へ二十 答^{こた}て日^{いひ}けるハ師^しよ是^{これ}みあ我^{われ}が幼^いきより
 守^{まも}れるもの也^{なり} 二二 イエス彼^{かれ}を見^みて愛^{あい}ミ日^{いひ}けるハ爾^{なんぢ}は不一^{ひとつ}を

虧^かゆきて其^{その}所有^{もちもの}をうり貧^ま者^{もの}は施^ほせ然^さは天^{てん}は於^{おい}て財^{たから}あらん
 而^{しか}して來^きり十字^お架^しを操^さて我^{われ}は從^まへ二三 彼^{かれ}この言^{ことば}は因^より哀^{あは}れ
 憂^{うれ}て去^{さり}ぬ彼^{かれ}ハ大^{おほ}い産^{さん}業^{げふ}を有^もて者^{もの}はななり二三 イエス環^{かま}
 視^みてうの弟^ま子^ごは日^{いひ}けるハ財^{たから}を有^もて者^{もの}の神^{かみ}の國^{くに}は入^いるハ如何^{いか}
 は難^{かた}かハ二四 弟^ま子^ごこの言^{ことば}を駭^{おど}りイエス復^{また}こたへて彼等^{かれら}は
 日^{いひ}けるハ小^こ子^ごは財^{たから}を恃^たむ者^{もの}の神^{かみ}の國^{くに}は入^いるハ如何^{いか}は難^{かた}かハ
二五 富^と者^{もの}の神^{かみ}の國^{くに}は入^いるハ駱^{らく}駝^たの針^{はり}の孔^{あな}を穿^ほるハ却^{かへ}て易^{やす}
二六 弟^ま子^ごたち甚^いく駭^{おど}き互^{たがひ}は日^{いひ}けるハ然^さは誰^{たれ}か救^{すく}を受^うべき
二七 乎^や イエス彼等^{かれら}を見^みて日^{いひ}けるハ是^{これ}人^{ひと}にハ能^あざる所^{ところ}は
 神^{かみ}は於^{おい}て然^{しか}らき神^{かみ}ハ能^あざる所^{ところ}は也^{なり} 二八 是^{これ}は於^{おい}てベテ
 口^{くち}彼^{かれ}は日^{いひ}けるハ我^{われ}儕^{せい}一切^{いっさい}を舍^すて爾^{なんぢ}は從^まへり二九 イエス答^{こた}て

日けるハ誠ニ爾曹ニ告ン我ト福音の爲ニ家宅あるハ兄弟あるハ姉妹あるハ父あるハ母あるハ妻あるハ兒女あるハ田疇を舍る者ハ此の世にて百倍を受ザル者ナシ即チ家宅兄弟姉妹母兒女田疇を迫害ト共ニ受マタ後の世にハ窮乏き生を受ン然レ多の先ある者ハ後ニあり後ある者ハ先ニあるベシ○ さて彼等エルサレムニ上ル途間イエス弟子ニ先チ行ケレハ彼等おどろき且おそれテ從ヘリイエス十二を伴ヒテ將ニ已ニ及ンとする事を彼等ニ告給ヒけるハ 我儕エルサレムニ上リ人の子ハ祭司の長ト學者等ニ付キん彼等此を死罪ニ定め異邦人ニ付シ 又これを嘲弄シ鞭チ唾シ且これを殺ン斯テ第三日

一ニ甦ルベシ○ 三五 ゼベダイの子ヤコブトヨハ子イエスニ來テ曰けるハ師ヨ我儕が求る事を願クハ我儕ニ成たまヘ 彼等ニ曰けるハ爾曹ニ我ガ何を成ん事を欲フヤ 彼等一ヒけるハ爾榮を得ンとき我儕の一人を其右ニ一人を其左ニ坐セしめヨ 三八 イエス彼等ニ曰けるハ爾曹ハ求フ所を知キ爾曹ワガ飲トころの杯を飲ワガ受る所のパプテスマを受得ヤ 彼等一ヒけるハ能すベシイエス彼等ニ曰けるハ爾曹ハ實ニ我ガ飲トころの杯を飲マタ我ガ受る所のパプテスマを受ベシ 然レ我ガ右左ニ坐する事ハ我ガ予フベキニ非ラニ備ラきたる者ハ予らるベシ 四一 十人の弟子これを聞テヤコブトヨハ子を憤レリ 四二 イエス彼等を召テ曰ケ

るハ異邦人の君と見る者ハ其民を治また大ある者ともハ
 彼等の上は權を執これ爾曹が知どころ也 然と爾曹の中
 にてハ然す可らき爾曹のうち大ならんと欲ふ者ハ爾曹は
 役る者ともあらん 又爾曹のうち首たらんと欲ふ者ハ
 凡の人の僕とあらん 蓋人の子の來るも人を役ふ爲は非
 き反て人ハ役をれ且おほくの人は代うの命を予て贖とな
 らん爲あり ○ 斯て彼等エリコに至りイエスその弟子と
 大ある群集の人々と共エリコを出る時テマイの子ある
 パルテマイといふ醫者路の旁は坐して乞ねけるが ナザ
 レのイエスなりと聞て呼り曰けるハダビデの裔イエスよ
 我を恤み給へ 多の人々これハ緘黙と戒めけれとも愈よ

ほくりてダビデの裔よ我を恤ミ給へと曰けきは イエス
 立止りて彼を召と命じければ人々醫者を召て彼は曰ける
 ハ心を安んせよ起 イエス爾を召 醫者その表衣を乗たち
 てイエスよ來れり イエス答て彼は曰けるハ爾われは何
 を爲れんと欲ふや醫者いひけるハ主よ見さん事を欲ふ
 イエス彼は曰けるハ往さんちの信仰なんちを救へり直よ
 彼みゆることを得 イエスよ從ひて路を行り

第十一章

かれら橄欖山のベツパゲとベタニヤに至りエル

サレムは近ける時イエス二人の弟子を遣さんとして 彼
 等ハ曰けるハ爾曹對面の村は往かしこは入は頓て人の未
 だ乗ざる所の繋ける驢馬の子を見べし其を解て牽來れ

もし誰たれも爾曹なんぢらを何なんゆゑ然しかする乎やといふ者ものあらば主あかの用ようありと曰いさらば直ただに其そのを此こゝに遺おくべし 彼等かれらゆきて門もんの外うの岐路ちまじに繋つなげる驢馬ろばの子こを見て之それを解とければ 其處そのに立たる人々ひとびとのうち或人あるものかれらに曰いけるハ此驢馬このろばの子こを解とて如何いかする乎や 弟子でいイエスの命いのちせし如ごとく曰いしかば遂つひに許ゆるたり 七しち弟子でい驢馬ろばの子こをイエスに牽ひきたりて己おのが衣いを其上そのうへに置おければイエスこれに乘のり 人々ひとびとおろくハ其衣そのころもを路上みちに布あきあるひハ樹きの枝えだを伐きりて路上みちに布あき 九くかり前まへにゆき後あとに從まふ 人々ひとびと呼よび曰いけるハホザナよ主あかの名なに託たくて來きる者ものハ福さいはひあり 十じゆ主あかの名なに託たくて來きる我儕われらの父ちちあるダビデの國くにハ福さいはひあり 至いた上處たかきところにホザナよ 十二じふにイエスエルサレムエルサレムに至いたり聖殿みやに入いりて

盡つくくみまはし時ときを以もて慕くれふ及およびければ十二じふにと借せふベタニヤ 十二じふに出往いでゆり 十三じふさん明日あくるひかれらベタニヤより出いでし時ときイエス饑うれ 十三じふさん遙はるかに葉はある無花果いちじくの樹きを見てその樹きに何なんう有あるとて 來きし葉はの他ほかにも見みざりき是無花果いちじくの樹きの時ときに非あらは也なり 十四じふしゆイエスこの樹きに對むかひて今いまよりのち永久いつまでも爾曹なんぢの果みを食くらふ人ひと あらざれといふ弟子でいこゝを聞きり 十五じふご彼等かれらエルサレムエルサレムに至いたりイエス殿みやに入いりてその中なかに賣うり買かひする者ものを殿みやより逐お出いだし 兌銀者りやうがへするものの案たい鴿はとを鬻うる者ものの椅子いすを倒たし 十六じふろくかつ器具うつはものを以もて殿みやを過とることを許ゆるさざり 十七じふしちまた彼等かれらに諭まりて曰いけるハ我室わがいへハ萬ばん國こくの人ひとの祈いのりの室いへと稱せまはるべしと錄あるされたるに非あらや然しかる 十八じふはち爾曹なんぢらハ之それを盜賊ぬすびとの巢すとあせり 學者がくと祭司さいいの長ながこゝを

聞て如何してかイエスを喪さんと謀しが彼を懼たり蓋人々みお其教よ駭きたまは也○ 日くれてイエス城邑を出行り 翌朝かれら無花果の樹を過る時うの根より盡く枯たるを見る 二二 ペテロ憶出てイエスよ日けるハラビ見よ詛し所の無花果樹ハ枯たり 二三 イエス答て彼等よ日けるハ神を信せよ 二四 誠よ我あんぢらよ告ん誰にても其心よ疑ふ事かく其いふ所の言ハ必き成べしと信じ此山よ移て海よ入といえむ其言の如く成べし 二五 是故よ我あんぢらよ告ん凡う祈禱の時うの求ふ所のものハ必き得べしと信せは必き得べし 二六 又あんぢら立て祈禱せる時もし人を憾こと有は之を免せ蓋天よ在す爾曹の父よ爾曹も亦うの過を免され

二六 ん爲なり 二七 ちらの過を免し給ハじ 二八 エス殿を行るとき祭司の長學者および長老等きたりて 二九 彼よ日けるハ何の權威を以て此事を行や誰が此事を行べき爲よ爾よ此權威を與しや 三〇 イエス答て彼等よ日けるハ我も一言なんぢらよ問ん我よ答よ然は我あんぢらよ何の權威を以て之を行といふ事を告べし 三一 ヨハ子のバプテスマハ天よりう人よりう我よ答よ 彼等たがひよ論じ日けるハ若し天よりと云は然は何故かれを信せざるかと日ん 三二 もし人よりと云は彼等民を懼たる也うハ民みおヨハ子を預言者と爲よ因 三三 遂よ答て知きと日イエス答て日ける

ハ我われも何なにの權威けんいを以もて之これを行なすカ爾曹なんぢらも語かたらじ

籬まがきを環めぐらし酒榨さかをほり塔ものかをたて農夫のうふも租與かて他ほかの國くにへ往ゆし

期まきいたりけきは葡萄園ぶどうばたけの果かを取うけ取とん爲ためも僕あもえを農夫のうふの

所もとも遣つかはしけるも農夫等のうふどもこきを執とらへ打撲うちたきて徒むなく返かへしめ

たり四また他ほかの僕あもえを彼等かれらも遣つかはしくも農夫等のうふどもこきを石いにて

うち首かうえも傷きつつけ辱はづかしめて返かへしむ五又不またかれ者ものを遣つかはしくも

之これをも殺ころせり又不またかよ多おほく遣つかはしくも或あるひハ撲うちあるひハ殺ころし

ぬ六爰あゝも一人ひとりハ愛子あいこありけるが此このわが子こハ敬うやまふあらんと

曰いひて遂つひも其子そのこを遣つかはしくも農夫等のうふどもたがひも曰いひけるハ此このハ

嗣子あとつぎあり率いこきを殺ころさん然さらは産業さんげふハ我儕われらの者ものとあらんハ

乃すなはち執とらへて之これを殺ころし葡萄園ぶどうばたけ外うとも棄すてたり九然まは葡萄園ぶどうばたけの

主人あるじなよを爲なすべきか彼かれきたりて農夫等のうふどもを打滅うちほろし葡萄園ぶどうばたけを

他ほかの人ひとも託あそふべし十工匠いへつくりの棄すてたる石いハ屋いへの隅すみの首石あやと成なれ

り十二こき主あもの成なたまへる事ことにして我儕われらの目めも奇あやとする所ところ

ありと録とくさきしを未いまだ讀よまざる乎か十二 彼等かれらこの譬たとへハ已等おのれらを指さし

て語かたまりと知ありイエスを執とらんとせしかとも衆人ひとを懼おそれてイエ

ス十三を去さりゆけり○ 彼等かれらイエスを其言そのことばも由よりて陷おといれんとし

てバリサイの人ひととヘロデの黨ともの中うちより數人すにんを遣つかはせり十四遣つかはし

されし者等ものどもイエスの所もとも來きり曰いひけるハ師あよ爾なんぢハ眞まことなる者もの

あり又また誰たれにを偏かたよらざる事ことを我等われらハ知あるハ貌かたちも依よりて人ひとを取とら

申まこと誠まことを以もて神かみの道みちを教をしれはなり貢みつぎをカイザルカイザルも納をさむるハ宜よき

新約全書 まこでん第十二章 自一至八節

六十一

や否われら納べきり納ざる可か 十五 イエスうの實からざる
 を知て彼等曰けるハ何ぞ我を試るやデナリを携來りて
 我を觀よ 十六 かれら携來りければイエス彼等曰けるハ此
 像と號ハ誰か答てカイザルありと曰 十七 イエス曰けるハカ
 イザルの物ハカイザル歸し又神の物ハ神歸すべし彼
 等これを奇とせり 十八 復生あしと曰あせるサドカイの人
 きたりてイエス問けるハ 十九 師よ我儕もモーセが書遺る
 にハ人の兄弟もし子あくして妻を留し死はうの兄弟この
 妻を娶て兄弟の裔を立べしと 二十 爰も七人の兄弟ありしが
 長子妻をめぐり子あくして死 第二の者これを娶また子
 あくして死 第三もまた然す七人みあ之を娶たれと子あ

く終よハ此婦も死り 二三 復生の時かれら甦らは此婦ハ誰の
 妻と爲べきり蓋七人おあじく之を娶たれば也 二四 イエス答
 て彼等曰けるハ爾曹ハ聖書をも神の能をも知ざるよ因
 て謬れるからき乎 二五 うれ死より甦る時ハ娶き嫁がき天よ
 ある使者等の如し 二六 死し者の甦る事よ就てハモーセの書
 棘中の篇よ神かきよ語て我ハアブラハムの神イサクの神
 ヤコブの神ありと曰たまひしを爾曹讀ざる乎 二七 神ハ死し
 者の神よ非き生る者の神あり爾曹大よ謬れり 二八 學者の
 一人かれらの議論を聞てイエスの善これよ應しを 二九 知きた
 り彼を問けるハ諸 三十 誠のうち何れ首ある乎 三十一 イエス彼よ
 答けるハ諸 三十二 誠の首ハイスラエルよ聽け主ある我儕の神

ハ即ち一の主あり 三十一
 力を盡し主ある爾の神を愛すべし是誠の首あり 三十二
 亦これよ同己の如く爾の隣を愛せよ斯より大なる誠
 三十三
 かし 學者イエスよ曰けるハ善かふ師よ爾神ハ即ち一よ
 して他よ神かしと曰しハ誠なり 三十三
 また心を盡し智慧を盡
 し精神を盡し力を盡して之を愛し又おのれの如く隣を愛
 するハ諸の燔祭と禮物よりも愈るあり 三十四
 イエス彼が道理
 を知る答を見て之よ曰けるハ爾神の國より遠うらき此の
 三十五
 ち敢てイエスよ問者ありき ○ イエス殿よ在て教誨を
 爲る時かれらよ答て曰けるハ何ぞ學者ハキリストをダビ
 デの裔といふ乎 三十六
 夫ダビデ聖靈よ感じて自いふ主わが主

よ曰けるハ我なんちのてきを爾の足発とあすまで我右よ
 三十七
 坐せよと 如此ダビデ自ら彼を主と稱たり然は如何で其
 裔あらんや多の人々喜びてイエスよ聞ことを爲り ○ 三八
 イ
 エス教をなせる時かきらよ曰けるハ長き衣服を衣てある
 き市上にて人の間安會堂の高座筵席の上座を好 また
 三十九
 贅婦の家を吞いつえり長き祈をする學者を謹防よ彼等の
 四十
 罪せらるること尤を重し ○ イエス賽銭の箱よ對て坐し
 人々の錢を箱よ入るを見たまひしよ多の富者ハ多く投入
 四十一
 たり 一人の貧き贅婦きたりてレプタ二を投入る此ハ四
 四十二
 厘かきよ直きり 四十三
 イエス子の弟子を召て彼等よ曰けるハ
 四十四
 誠よ我あんぢらよ告ん箱よ投入し凡の人々よりも此貧き

接婦ハ多く投入たり四四　ろハ彼等ハ皆ろの餘を以て
 入いれこの婦きんなんハその不足せもーきどころより其すべての所有もちものすあそち
 全業ぜんげふを盡まぎくく入いれたきほ也あり

第十四章 イエス聖殿より出ければ一人の弟子かきよ曰け
 るハ師よ觀みたまへ此石このいしこの殿宇いへいうよ盛んふらき乎やニ
 エス答まこへて曰いひけるハ爾曹なんぢらこの大おほいある殿宇いへを見みるか一の石いしも石
 の上うへよ圯くづれきしてハ遺のこじ三　イエス橄欖山かんらんざんにて殿みやよ對むかひ坐ま
 し給たまひしよペテロヤコブヨハ子アデレ竊ひうかよ問とけるハ四何
 の時ときこの事ことあるや又またすべて此事このことの成なん時ときハ如何いかある兆あざあ
 るや我われ儕らよ告つげたまへ五　イエス答まこへて彼等かれらよ曰いひけるハ人ひとよ欺あざむ
 かきざるやう慎つひめよ六　蓋あはおなくの人ひとわが名なを冒まかり來きり我われハ

キリストなりと曰いひて多おほくの人ひとを欺あざむくべし七　爾曹なんぢら戰いくさと戰いくさの風うは
 聲こゑを聞きくとき懼おそるゝ勿なれ是等これらの事ことハみな有あるべきあり然しかども
 末期まはりハ未いまだ至いたらき八　民たみハ起おこりて民たみをせめ國くにハ國くにを攻せめまた隨まろ
 在くよ地震ちしんあり饑饉きん變亂まだれあり是等これらハ苦難くるしみの始はじめなり九　爾曹なんぢらみ
 づから慎つひめよ蓋あはんぢら集議あふ所ところよ付つきよ又會堂あひむちうにて擡もちう
 たき且證かつあかを爲なしたため我事わがことよ因より侯つかおよび王まうの前まへよ曳立ひきたら
 るべし十　而しかして福音ふくいんハまづ萬民ばんみんよ宣傳のんぷんざるを得ねき十一　人ひとあ
 んぢらを曳解ひきわきは以前まへより何を言いはんと慮はかりまた思煩おもひわづらふ勿なき
 惟ただんぢら其そのとき賜たまふ所の言ことを曰いべし蓋あはものいふ者ものハ爾なんぢ
 曹らよ非あらき聖靈せいれいなり十二　兄弟あやうだいハ兄弟あやうだいを死あしめ付つし父ちちハ子こを付つし
 亦また子こハろの父母ちちははよ逆さからひて之あれを死あしめ十三　又またんぢらハ我われ名な

よ縁よりて凡すべての人ひとは憎にくまるべし然されと終はりまで忍しのぶ者ものは救すくはるゝこと
 を得はん十四 預言者せんダニエルやが言いひし所ところの殘暴あらすにくむ可べきものゝ
 立たつべからざる所ところよ立たつを見みは讀者ものよく思おもべし其時そのときユダヤやよ
 をる者ものハ山やまよ避のがれよ十五 屋上やのうへよをる者ものハ室いへよ下くだる勿なかき又また物もの
 を取とらんとて其家そのいへよ入いる十六 田たよをる者ものハ其衣服そのころもを取とら
 どて歸かへる勿なかれ十七 其日そのひにハ孕はらむ者ものと乳ちを哺のます婦きんハ禍わざはひある
 哉かな 十八 さんぢら冬ふゆにぶることを免まぬかれん爲ためよ祈いのき十九 其日そのひよ患なや
 難かあらん此かくの如ごとき患難なやみハ神かみの物ものを創つくりたまひし開關かいびやくより
 今いまよ至いたるまで有ありき亦また後のちよも有あり二十 もし主そのの日ひを減すく
 少すくし給たまは一人ひとりだよ救すくはるゝ者ものあし然されと主そのの選えらたまへる所ところ
 の選えらばし者ものの爲ためよ其日そのひを減すく少すくし給たまふし二 其時そのときもしキリス

ト此こよあり彼かれ二 在あり三 爾曹なんぢらよいふ者ものあるとも信まんぢる勿なかれ二二
 うハ偽にせキリスト 偽にせ預言者せんおこりて休徵やすと奇まじ能よを行おこなひ選えらば
 れたる者ものをも欺あざむくことを得は欺あざむくべければ也なり 二二 さんぢら
 慎つとめ我われ預あらめ爾曹なんぢらよ盡まことく之それを告つぐ二四 厥時そのときこの患難なやみのゝち日ひ
 ハ晦くらく月つきハ光ひかりを失うひ二五 天てんの星ほしハおち天てんの勢いきほハ震ふるふべし二六
 其そのとさ人々ひとハ人ひとの子この大おほい二七 權威けんと榮光えいこうを以もて雲くもの中うちよ
 現あらは來きるを見みん二七 又また其そのとき人ひとの子この使つか者ひ等たちを遣つかはして
 地ちの極はてより天てんの極はてまで四よ方ほうより其選そのえられ二八 者ものを集あつむべし
 夫うなんぢら無い花果樹けよ由よりて譬たとへ二九 學まなぶの枝えだすでよ柔やわらよむ
 て葉はめめめは夏なつの近ちかき知しる 此この如ごとく爾曹なんぢらも凡すべて是等それらの事こと
 を見みは時ときちうく門かど口ぐちよ至いたると知しる 三〇 われ誠まことよ爾曹なんぢらよ告つぐん是

等らの事こととくく成なるまでハ此この民たみハ逝うせざるべし 天地てんちハ廢うせ
 ん然さと我わが言ことばハ廢うせじ 其その日ひの時ときを知しる者ものハ惟ただわが父ちちのモ
 り天てんヨある使つかひ者ものも子こも誰たれも知しる者ものなし ○ 此この日ひいづれの時とき
 きたる乎かを知しるされハ爾曹なんぢらつゝしめて目めを醒さし祈いのり禱たごせよ
 ろれ人ひとの子こハ遠行たひだちせんと志こころて其その權けんを僕等あもれどもヨ委ゆたね各おの／＼ヨ爲なすべ
 き事ことを任まかせ又また聞者きこもりヨ怠おこらき守まもれ命いのちじて家いえをさる人ひとの如ごと
 し 是故ゆゑヨ爾曹なんぢらも怠おこらき守まもれ蓋うは家いえの主人あるじあるひハ夕ゆゆう
 あるひハ夜半よなかあるひハ鷄鳴にはせりあけころ時ときあるひハ早晨よあけヨ歸かへるヲ知し
 されば也なり 恐おそくハ不意おとほの時とききたりて爾曹なんぢらが眼めるを見みん
 われ怠おこらきして守まもれと爾曹なんぢらヨ告つるハ即すなはち凡すべの人ひとヨ告つるな
 り

第十四章

さて逾越すぎこ即すなはち除たはいれぬばんのいはひ 節ふつの二日ふた前かまへヨ祭司さいしの長おさと學がく

者またち詭計たばかりを以もてイエスを執とらへ殺ころさんとし 二日ふた日ひけるハ祭まつり
 の日ひにハ爲なすべからき恐おそくハ民たみの中うちヨ亂らんおこらん ○ イエ
 スベタニヤの癩病らいびやうシモンシモンの家いえヨて食た居ゐ居ゐたまへる時ときある
 婦きん蠟石ならふせきの盒うつはヨ價あ貴ひたかきナルドの香膏あぶらを盛もりて携もち來きり其その盒うつはを裂やぶ
 りイエスの頭かうヨ膏あぶらを沃そそたり 或ある人々ひと／＼互たがひヨ怒いかりを含ふくみひける
 ハ此膏このあぶらを糜つひやすハ何故なんゆゑぞや 之これを驚うらは三百さんびやく有奇あまのデナリを
 得えて貧者まづりものヨ施ほせことを得えんと此婦このきんを言い答こたむ イエス曰いひ
 るハ彼かれヨ係かへる勿なき何なんぞ此婦このきんを擾なやまや我われヨ善事よきことを行おこなへる也なり
 七ななまづりもの常つねヨ爾曹なんぢらと借せム在あれハ爾曹なんぢら意まこヨ隨まかせて彼等かれらを濟たすく
 ことを得えべし我われハ常つねヨ爾曹なんぢらと借せム在あらハこの婦きんハ力ちからを盡つく

して作り蓋あらか志め我を葬る爲わが身よ膏を沃しあり
 九 我まことよ爾曹よ告ん天の下いづくにても此福音を宣
 傳らるゝ處にハ此婦の行し事も亦ろの記念の爲よ言傳ら
 るべし 十 さて十二の一人あるイスカリオテのユダイエス
 を付さんどて祭司の長よ往しよ 十二 彼等こきを聞て悦び銀
 子を予んど約せしかはユダハイエスを付さんと機を窺へ
 り ○ 除酵節の首の日すなえち逾越の羔を殺すべき日
 弟子イエスよ曰けるハ逾越の食を何處へ往て我備ふべ
 き乎 十三 イエス二人の弟子を遣さんとして之よ曰けるハ京
 城よ往さらば水を盛たる瓶を挈る人よ遇べし之よ從へ 十四
 ろの入どころの家の主人よ師いふ我弟子と借よ逾越を食

すべき客房ハ安よ在やと曰 然れば彼陳設たる大ある樓
 房を爾曹よ示べし我儕の爲よ其處よ備よ 十六 弟子ゆきて京
 城よ入しよイエスの曰たまへる如く遇しかは逾越の備を
 なせり ○ 日暮てイエス十二の弟子と借よ來れり 十八 かれ
 ら席よ就て食する時イエス曰けるハ誠よ我あんぢらよ告
 ん我と借よ食むる爾曹のうち一人われを賣すべし 十九 彼等
 憂て各々イエスよ言出けるハ我ある乎 また他の一人も曰
 けるハ我なる乎 二十 イエス答て曰けるハ十二の中の一
 人われと共よ手を盂よ着る者是あり 二一 人の子ハ己よ就て録さ
 れたる如く逝ん然と人の子を賣す者ハ禍ある哉その人ハ
 生まれしあらは幸ありし爲ん 二二 かしら食する時イエスバ

ンを取て祝し之を撃かれらよ予て曰けるハ取て食へ此ハ
 我身あり 二三 また杯を取て謝し彼等よ予ければ皆この杯よ
 り飲り 二四 イエス曰けるハ此ハ新約の我血よして衆の人の
 爲よ流す所のもの也 我まことよ爾曹よ告ん今よりのち
 新しきものを神の國よて飲ん日までの葡萄よて製るもの
 を飲じ 〇 二六 かきら歌を詠て橄欖山よ往り 二七 イエス彼等よ
 曰けるハ今夜なんぢら皆わきよ就て凝かん蓋われ牧者を
 撃ん其とき綿羊散べしと録されたまは也 然と我よまが
 へりて後なんぢらよ先ちガリラヤよ往べし 二九 ペテロイエ
 スよ曰けるハ假令みお礙ども我ハ然らき 三十 イエス彼よ曰
 けるハ我まことよ爾曹よ告ん今自この夜鶏二次鳴まへよ爾

三次わきを知きと曰ん 三一 彼また方言いひけるハ我ハ爾と
 借よ死るとを爾を知きと曰じ弟子みお如此いへり 三二 斯て
 彼等グツセマ子といふ所よ至りイエスその弟子よ曰ける
 ハ祈る間こくよ坐せよ 三三 遂よペテロヤコブヨハ子を伴ひ
 ゆき甚しく憂へ哀を催し 三四 彼等よ曰けるハ我心いたく憂
 て死るばかりあり爾曹こくよ待て目を醒し居 三五 イエス少
 し進行て地よふし祈り曰けるハ若かおえど此時を去むめ
 給へ 三六 また曰けるハアバ父よ爾よ於て凡の事能ざるお
 じ此杯を我より取たまへ然と我が欲ふ所を成んとするよ
 非き爾が欲ふ所よ任せ給へ 三七 イエス來りて彼等の寝たる
 を見ベテロよ曰けるハシモンなんぢ寝たるう一時も目を

醒し居こと能ざる乎三八 誘惑よ入ぬやう目を醒かつ祈その
 心神三九ハ願ふとと肉體よわき也 復ゆきて同言を曰て祈れ
 り四十 返りて復かまらの寢たるを見る此ハ彼等その目倦た
 る四一ありイエス四二何と對ふ可やを四三知ざりき 三次きたりて
 彼等よ曰けるハ今ハ寢て安め充分四四あり時いたれり人の子
 ハ罪人の手よ賣さる四五也 起よ我儕ゆくべし我を賣す者
 近けり四六○ 斯いへる時たごちよ十二四七の一人あるユダ刃と
 棒とを携たる多の人々と共四八祭司の長學者および長老の
 所より來る イエスを賣者かれら四九號を五十あして曰けるハ
 我が接吻する者ハ其五一あり之を執て慎と曳去よ すすち
 來りてイエス五二よ近よりラピラピと曰て接吻せり 人々手

をイエス五三よ措て執ふ 傍よ立る者の一人刃を抜て祭司の
 長の僕を撃その耳を削り イエス答て彼等よ曰けるハ刃
 と棒とをもち盜賊を執る如くして我を執よ來る乎五四 わき
 日々五五ふんぢらと共五六殿五七よて教し五八爾曹五九わきを執六十ざりき然
 此ハ聖書六一よ應せんが爲六二あり 弟子六三み六四あ六五イエスを離て奔
 去ぬ 一少者六六の身六七よた六八麻六九の夜具七十を蔽七一てイエス七二よ從七三ひ
 たりし七四が逮捕七五の者等七六これを執七七ければ七八 かれ麻七九の夜具八十をす
 て裸八一にて逃去り八二○ 衆人八三イエスを祭司八四の長八五よ携往八六けるよ
 祭司八七の長八八長老八九および學者等九十こと九一く九二彼の所九三よ集九四まり
 ペテロ九五遠く離れてイエス九六よ從九七ひ祭司九八の長九九の庭一〇〇の内一〇一まで入
 僕一〇二と共一〇三よ坐一〇四して火一〇五よ燠一〇六まり居り 祭司一〇七の長一〇八および議員一〇九み

夫イエスを殺んとして證を求めども得き 多の人々イエ
 スは妄の證を言出せども其證あひき 或人々たちて妄の
 證を言出しけるハ 五八 かれ手を以て作たる此聖殿を毀ち三
 日の間も手を以て作ざる別の殿を建んと言しを我儕ハ聞
 五九 如何いひしが其證また符き 祭司の長中も立てイエ
 スは問ひひけるハ爾答る言あき乎この人々の爾も立る證
 據ハ如何 六二 イエス默然として何も答ざりければ祭司の長
 六三 また彼も問て曰けるハ爾ハ頷べき者の子キリストある乎
 六四 イエス曰けるハ然り人の子大權の右も坐し天の雲の中
 六五 現れ來るを爾曹みるべし 是は於て祭司の長その衣を
 裂て曰けるハ我儕あんぞ復ほかよ證據を求めんや 六四
 六五

潰たる言ハ爾曹も聞る所あり爾曹如何も意ふや彼等擧て
 イエスを死に當るべき者と擬たり 六五 或者ハ彼も唾じ又そ
 の面を掩ひ拳にて撃いひけるハ預言せよ亦僕等も手の掌
 にて彼を批り 六六 ペテロ下庭に在しは祭司の長のある婢き
 たりて 六七 其火も燠まり居を見つらく 彼を視て曰けるハ
 爾もナザレのイエスと惜も在し 六八 ペテロ肯えきして曰け
 るハ我これを知き亦あんちが言どころの事を識得ざるあ
 り斯て庭門も出ければ鶏鳴ぬ 六九 うの婢かれを見て傍も立
 る者も又いひけるハ此人もかの黨の一人あり 七十 ペテロま
 た肯えき少頃して傍も立る者またペテロに曰けるハ爾誠
 に彼の黨の一人あり蓋爾ハガリラヤの人あり其方言これ

に合り 七二 是に於てペテロ誓て我神の祟を受るとも爾曹が
 言うの人を我ハ識ざる也と曰しが 七三 此とき鶏二次鳴けれ
 はペテロイエスの鶏二次かく前も三次我を識きと曰んど
 言たまひし事を憶起し且こを思反して哭悲めり
 平旦も及び直も祭司の長長老學者たち凡の議員
 と共議てイエスを繋り曳携てピラトも解せり 二 ピラト
 彼も問けるハ爾ハユダヤ人の王あるやイエス答けるハ爾
 が言る如し 三 祭司の長多端をもて彼を訟ふ 四 ピラト復イ
 エスも問て曰けるハ何も答ざるか彼等が爾もついで證を
 立しこと幾何かりぞ乎 五 ピラトの奇と爲までよイエス何
 をも答ざりき 六 偕この節筵にハ彼等が求も任せて一人の

囚人を赦むの例あり 七 時もバラバと云る者あり己と共も
 謀叛せし黨と同一繋れ居たりしが彼等ハろの謀叛のとき
 人を殺し者等あり 八 人々聲を揚て呼り恒例の如せん事
 を求り 九 ピラト彼等も答て曰けるハユダヤ人の王を爾曹
 も我が釋さん事を欲むや 十 是ピラト祭司の長等の嫉も因
 てイエスを解したりと知ほあり 十一 祭司の長民どももバラ
 バを釋さん事を求と唆む 十二 ピラトまた答て彼等も曰ける
 ハ然ほユダヤ人の王と爾曹が稱る者にハ何を我が處ん事
 をあんぢら欲むや 十三 彼等また叫びて之を十字架に釘よと
 曰 十四 ピラト彼等も曰けるハ彼あんの惡事を行しや彼等ま
 すく叫びて之を十字架よ釘よと曰 十五 ピラト民の權びを

取んどしてバラバを彼等よ釋しイエスを鞭ちて之を十字架
 架よ釘ん爲よ付せり 兵卒等これを公廳よ携ゆき全營を
 呼集め 彼よ紫の袍をきさせ棘にて冕を編て冠しめたり
 斯て曰けるハユダヤ人の王安かれ また葦を以て其首を
 撃かつ唾し跪きて拜しぬ 嘲弄し畢て紫の衣をえぎ故の
 衣をきせて十字架よ釘んとて曳往しが アレキサンデル
 とルフの父なるクレ子のシモンと云るもの田間より來り
 て其處を經過りければ強て之よイエスの十字架を負せたり
 二三 イエスをゴルゴダ譯は即ち髑髏と云る所よ携來り
 没薬を酒よ和て飲せんと爲りしよ之を受さりき イエス
 を十字架よ釘しのち誰が何を取んど鬮を拈てその衣服を

分てり 朝の第九時よイエスを十字架よ釘 其の罪標を
 ユダヤ人の王と書つく 二人ハ盜賊かれと共よ一人ハ其
 右一人ハ其左よ十字架よ釘らる 此れ聖書よ彼ハ罪人と
 共よ算られたりと云しよ應り 往來の者イエスを詬り首
 を搖て曰けるハ噫聖殿を毀て之を三日よ建る者よ 自己
 を救て十字架を下よ 祭司の長學者等も同く嘲弄して互
 よ曰けるハ人を救ひて自己を救ひ能き イスラエルの王
 キリストハ今十字架より下べし然は我儕見て之を信せん
 又どもよ十字架よ釘られたる者等も彼を詬れり 第三十二
 時より三時よ至るまで徧く地のうへ暗かりぬ 第三十三
 イエス大聲よ呼りエリエリヲマサバクタニと曰これ

は吾神わが神ふんぞ我を遣たまふ乎と云るあり 傍らよ
 立たる者のうち或人これを聞て彼ハエリヤを呼なりと曰
 一人としり往て海峽をどり醋を漬せ之を葦束て彼よ
 飲しめ曰けるハ俟エリヤ來りて彼を救ふや否こころむべ
 し ○ イエス大ある聲を發て氣絶 殿の幔上より下まで
 裂て二と爲り イエスよ對て立たる百夫の長かく呼り氣
 絶じを見て曰けるハ誠よ此人ハ神の子なり ○ また遙よ
 望おたる婦ありし其中よ在し者ハマグダラのマリアおよ
 び年少ヤコブとヨセの母あるマリア又サロメあり 彼等
 ハイエスのガリラヤよ居たまひし時これよ從ひ事し者等
 なり亦この他にも彼と共よエルサレムよ上りし多の婦わ

たりき ○ 是日ハ備節日にて安息日の前の日ありし故
 日暮るとき尊き議員なるアリマタヤのヨセフと云る者き
 たれり此人ハ神の國を慕る者あり彼をからきピラトよ
 往てイエスハ屍を求たり ピラトイエスの己よ死るを奇
 と百夫の長を呼て彼ハ死てより時を経たるや否やを問
 百夫の長より聞て之を去り屍をヨセフよ予ふヨセフ泉
 布を買求め而してイエスを取下し之をその泉布にて裹
 磐よ鑿たる墓におき石を墓の門よ轉し置り マグダラの
 マリア及ヨセの母あるマリア其屍を葬し處を見たり
 安息日過てマグダラのマリアとヤコブの母ある
 マリア及サロメ香料を買どくのへイエスよ抹んとて來れ

二 七日の首の日いと早く日の出る時かれら墓より來り
 互に日けるハ誰ウ我儕の爲よ石を墓の門より轉し取もの
 有んか是ろの石をふえだ巨大あれは也 斯て彼等目を舉
 れは石の己に轉あるを見る 墓に入しよ白衣をきたる少
 者の右の方に坐せるを見て駭き異めり 少者かれらに日
 けるハ駭き異む勿れ爾曹ハ十字架に釘られしナザレのイ
 エスを尋ぬ彼ハ甦りて此に居る彼を葬し處を觀よ 且ゆ
 きて其弟子とペテロよ告よ彼ハ爾曹よ先ちてガリラヤに
 往り爾曹かしてよて彼を見べし即ち其ふんぢらよ言しが
 如し 彼等いで墓より奔れり且戰慄かつ駭き亦一言を
 も人よ語ざりき是懼しが故なり ○ イエス 七日の首の日

よあけおろ甦りて先マダガラのマリアに現る 曩よイエス
 彼より七の惡鬼を逐出せり 十 イエスと共よ在し者の悲哀
 める時よ此婦きたりて是等の事を告 彼等イエスの活て
 此の婦よ見え給ひしことを聞しが信せざりき 此後かれ
 らの中二人の者郷村へ往けるが路を行ときイエス變たる
 貌よて彼等よ現る 十三 この二人の者ゆきて他の弟子等よ告
 けれども亦これをも信せざりき ○ 又その後十一の弟子
 の食しをる時よ現れて彼等が信あきと其心の頭を責め
 給へり是かれらイエスの甦り給るのち其を見し者の言と
 ころを信せざりし故あり 十五 イエス 彼等よ日けるハ徧く世
 界を廻て凡の人よ福音を宣傳よ 十六 信じてバプテスマを受

る者ハ救れ信せざる者ハ罪ニ定らる也あり十七 信ざる者ニハ
 左の如き奇跡未たがふべし我名ニ託て惡鬼を逐出し異邦
 の方言をいひ十八 また蛇を操へ毒を飲ども害あく又手を病
 の者ニ按おは即ち愈ん十九 ○ 斯て主ハ彼等ニ語しのち天ニ
 舉られ神の右ニ坐しぬ二十 弟子たち徧く福音を宣傳ふ主も
 亦かれらニ力を協せ其從ふ所の奇跡をもて道の徴と爲た
 まへりアーメン

新約全書 馬可傳福音書 終

95-91194

神の御名に
 栄えを
 永遠に
 与へ給へ

